村人たちは、太鼓をたたいて踊ったり、鐘を鳴らして歌ったりして大喜びしました。

「おみよ、お前はえらいなぁ。毎日、よく働いてくれたおかげだ」

村の人たちは皆、おみよが休むことなく、一生懸命に働いている姿をちゃんと見ていたのです。

「かか様、たくさん採れてよかったねぇ」

うれしそうに声をかけるおみよを、母親は抱きしめました。

「お前にはずい分、ひどいことを言った。勘弁しておくれよ」

それから、母親はおみよもおたえも分け隔てなく、かわいがるようになり、人もうらやむほど仲良く暮らしました。

おみよが育てた豆の木の根の跡は、今、深く水をたたえる丸池になり、村も千石村と呼ばれるようになったそうです。

解説　西山郷史さん（加能民俗の会副会長）

伝承が町の名前に

かつて、米の代わりに年貢として納める地域があったほど、豆は貴重な食材でした。福井県にも、後妻が先妻の娘に意地悪をして渡した炒り豆から千石あまりの豆が採れ、木の幹で太鼓を作って永平寺に寄進したという話が伝わっています。

また、羽咋には後妻から能登・加賀・越中のちょうど国境に豆を一粒まいてこいと指示される話も伝承され、豆の大木から作られた太鼓が總持寺（輪島市門前町）、永光寺（羽咋市酒井）、道興寺（志賀町舘開）に寄進されたと言われています。このように太鼓とのかかわりで語られることの多い豆の木のむかし話ですが、「千石の豆の木」の場合は地名の由来にもなっているところが興味深い点です。

むかし話ゆかりの場所

豆の木の跡とされる丸池

丸池 まるいけ

羽咋市千石町

豆の木の根っこの跡と伝えられる丸池。山里の高台にあり、棚田が広がる集落を丸池から見渡すことができる。地元にはむかし話を伝承する「千石豆の木会」があり、池のほとりには物語を記した案内板も立てられている。また、千石の名は町名として今も残り、町に続く橋は千石橋と名付けられている。

周囲の自然と調和する木製の立て札がむかし語を伝える